

イエメン現代史

1934年ターイフ協定

－イエメンとサウジアラビアの国境紛争－

イエメンとサウジの両国間の戦争勃発を導く国境紛争が起こったが、この紛争はヘジラ暦1340年、西暦1921年まで遡る（注:1）。というのはこの紛争は、アシール・アルジバール地方（アシール地方の山岳地帯）の最大部族であるアーイド家の部族とその地方で影響力のある首長達が、アシール・ティハーマ（海岸地帯のティハーマ地方寄りのアシール地方）で影響力を持つムハンマド・ブン・アリー・アルイドリースーに対して、アシール・アルジバール地方の諸事に関して干渉を止めるように、と反乱を起こしたからである。

（注1）：「イエメンの軍事史」 スルターン・ナージー教授 P.84 及び「現代イエメンの構図」 サイド・ムスタファー・サーリム教授 P343 より引用要約

この干渉は、アーイド家の影響下にあった都市アブハーが含まれていたことによるものであった。この都市はバイト・アルカーシム王朝が崩壊し、その影響力がそこから取り去られて以来アーイド家の影響下にあった。そして当時は、イエメンにおける第2回目であり、且つ最後となったトルコの統治が、アシール・アルジバール地方とそれ以外のイエメン地域において、その影響力を及ぼしていた。そして第1次世界大戦の終結後、トルコはそこから一掃され、アシール・アルジバール地方はアーイド家の影響下に戻るのであった。

ムハンマド・ブン・アルイドリースーは、既にヘジラ暦1331年、西暦1912年にサブヤーを中心地とするアシール・ティハーマ地方に、表面上は親トルコの地方有力者を装い、自らの首長国を築いていた。これによりアシール地方は、その山岳地帯をアーイド家、海岸地帯であるティハーマ地方をイドリースー族と分割されることとなった。

ムハンマド・ブン・アルイドリースーは、第1次世界大戦前にイタリアとその後にはイギリスと友好協力条約を結ぶが、これら両国より武器、軍事物資、食料、弾薬を補強することにより、彼は力を増していった。そしてアシール・アルジバール地方へと彼の影響力を広げる野望を持つようになり、実際に武力衝突を起こし始めた。

事態は、アルハサン・ブン・アリー・ブン・アーイドをして、メッカの大守（シャリーフ）アルフセイン・ブン・アリー・アルハーシミーに救援を求めさせることになる。そして彼は

イドリース一族に対して、ヘジラ暦1339年、西暦1920年に蜂起する。

一方アルイドリースーは、アーイド家に対抗するため、メッカ大守のライバルであるナジド地方のスルターンのサウド家のアブドルアジーズに応援を求めざるを得なくなった。これによりサウド家のアブドルアジーズ王はアラビア半島に対する支配力を伸ばす、という彼の野望を実現する機会を得、その実現の為の計画作りをしたが、それは次の様なものであった。

第一にアシール・アルジバル地方のアーイド家を抑圧し制圧すること。これによりアシール地方方面へのイマーム・ヤヒヤーの侵攻を阻止することが出来、またヘジャーズ地方のメッカの大守に対する攻撃の準備段階として、その孤立化を計れる。

その後アシール・ティハーマ地方のイドリース一族に対して影響力を行使し、現在アルイドリースーが影響力を保持しているティハーマ地方を英国の援助を得てホデイダとモカまで占領し、イマーム・ヤヒヤーの影響力をイエメンの山岳地帯に限定し狭めてしまう、というものだった。

この様にして彼の計画に沿って事態は進展していった。ファイサル・ブン・アブドルアジーズが父親を代表して、ムハンマド・アルイドリースーと締結した合意には、アルイドリースーが（元来何ら所有していなかった）アシール・アルジバル地方の放棄とイマーム・ヤヒヤーがかつて直接支配し、アルイドリースーが影響力等持ったこともないサアダ州のサハールとバニー・ジュマアの両地域の放棄が規定されていた。

この合意によりアブドルアジーズの準備が整った後、彼はアーイド家の蜂起を抑圧し、そこから西方ではイエメンのティハーマ方面へ、東方ではアシール・ティハーマ地方のナジュラン方面へと勢力の拡大を開始した。

第1回目のアーイド家に対する抑圧にもかかわらず、アルハサン・ブン・アリー・ブン・アーイド翁は服従しなかった。そして約1340年半ば～42年半ばまで継続する戦争へと突入していった。しかしサウジ側が優勢であり、結局アシール・アルジバル地方に対する影響力をアーイド家は取り戻すことが出来なかった。

ムハンマド・ブン・アルイドリースーの死後、アルハサン・ブン・アルイドリースーと締結した防衛協定に沿い、アブドルアジーズはアシール・ティハーマ地方へ実際的な影響力を伸ばしていった。そしてこれから詳細を知ることになるが、イマーム・ヤヒヤーとの戦争を通して、ホデイダの港までティハーマ地方全域に影響力を及ぼすのであった。

ータヌーマ事件ー

ヒジュラ暦1340年（西暦1921年）、イエメン人巡礼者達は、メッカ巡礼に行く途中のヒジャーズ地方の南部、ワーディ・タヌーマを通過中、彼等は当然非武装であったが、ナジド

王であるサウド家のアブドルアジーズの軍隊に襲われた（注2）。軍隊の大多数がワッハーブ派のナジド人達で、彼等は逃れ得た少数の巡礼者以外を皆殺しにした。これは、アブドルアジーズ王が、彼の同盟者であるアシール・ティハーマの首長ムハンマド・ブン・アリー・アルイドリーシーを支援するために、アシール・アルジバル地方のアーイド家と戦争を起こした直後のことであり、タヌーマ事件は、イマーム・ヤヒヤーとアブドルアジーズの緊張を高める結果となった。

（注2）：「イエメン歴史精選」 アルジャラーフィー著 P. 323 第1刷、「希望の達成」アルアルシー著 P. 93、「現代イエメンの構図」サイード・ムスタファー・サーリム教授 P343

またタヌーマ事件は、サウド家のアブドルアジーズとヒジャーズ地方の大守（アッシャリーフ）であったフセイン・ブン・アリー・アルハーシミー間の戦争の最中に起こった出来事であった。アブドルアジーズは巡礼のイエメン人達が戦場であるワーディ・タヌーマを通過し、この事件に晒されることになったのだ、とこのタヌーマ事件の責任を言い逃れしようとした。

またアブドルアジーズ軍は、イエメン人達を巡礼者の姿を装ったイマーム・ヤヒヤーからのメッカ大守（フセイン）への援軍である、と思ったとか、その他取るに足らない言い訳や口実を付け加えた。しかしイエメン人達が単にメッカ巡礼が目的であったということは、彼等が非武装であったこと、そしてイマーム・ヤヒヤーとアブドルアジーズがこの事件に関する会談を行っている途中で、殺戮後イエメン人達から奪い取った携行品を返却した事等が証明している。またイエメン人に対する「血の贖い金（ディーア）」をアブドルアジーズがイマーム・ヤヒヤーに渡したとも伝えられている。

この巡礼の途中で殺された人数は3000～8000人の間で伝聞によって差異があるが、殺戮から助かった者の数は10名を超えない、という見解で全ては一致している。このタヌーマ事件の翌年、この怒りと嫌悪のためであろう、イエメン人達は誰一人として巡礼をしなかった。

— 国境線の状況の展開とイマーム・ヤヒヤーとアブドルアジーズ王との間の戦争の勃発 —

ナジド王であるサウド家のアブドルアジーズは、ヘジラ暦1343年（1924年）ヘジャーズ地方を占領した。そして東部及び北部からアシール地方全域（注3）を包囲し、そしてそこを占領する準備を始めた。

（注3）：「現代イエメンの構図」サイード・ムスタファー・サーリム教授 P343
「イエメン歴史精選」アルジャラーフィー著 P. 237

彼を助け支援したのは、サブヤーにいたイドリース一族との防衛協定の締結であった。この協定はヘジラ暦1345年（1926年）メッカにおいてアルハサン・ブン・アルイドリースーと締結されたものであった。

この事により、イマーム・ヤヒヤーは態度を硬直化させ、イドリース一族に対して彼の国家の中での地方自治を与えることを拒否させ、彼等の首長国を壊滅させることに固執させる理由となったことは、既に「イドリース一族とイマーム・ヤヒヤー」の章で詳細した。

アルハサン・アルイドリースーは、アブドルアジーズ王とメッカの大守との戦争の期間中に、前者の保護の下にイドリース一族が入る事を提案していたが、アブドルアジーズ王は彼とイマーム・ヤヒヤーとの中立を保持するふりをしていた。

そして提案を受け入れたのであったが、恐らく彼自身がヘジャーズ地方を占領した後、アラビア半島全域を支配するという野望を実現する為に彼の側から働き掛けたのであろう。

イマーム・ヤヒヤーは国境線問題を解決する方策を探るために、使節団を取り交わしている。イマーム・ヤヒヤーはこの問題に関して、イエメンから分離できない一部であるアシール地方からアブドルアジーズ王を一掃することを基幹とし、国境を策定しようと望んでいた。しかし両者の間の長く繰り返された会談は、アブドルアジーズ王の頑迷な態度により結論を導けなかった。

イマーム・ヤヒヤーは当時、二者択一のより安易な選択しか見出せなかった。それはイドリース一族との戦闘の停止、そしてアブドルアジーズ王がヘジャーズ地方を占領した後、招待した呼び掛けに応じて、メッカのイスラーム会議に代表団を送ることであった。

この代表団により平和裏にアブドルアジーズ王とアシール問題を解決する、という希望がイマームを動かしたのであった。同様に南部国境におけるイギリスとの問題、そして未だに彼の勢力外にある諸地域を従属させることも上述の展開の要因となった。

イエメンとサウジ両者間の会談が、国境線問題とアシール地方の問題に決着をつけられなかった時に（注4）、アブドルアジーズ王はアシール・アルジバル地方に直接手を伸ばし、その総督としてファハド・ブン・ズバイルを任命した。

（注4）：「イエメンの軍事史」 スルターン・ナージー教授 P.85、「イエメン、人間と文明」P.175、「イエメン歴史精選」アルジャラーフィー著 P.237

ヘジュラ暦1351年（西暦1932年）事態は、アルハサン・アルイドリースーをして、かつての同盟者であるアブドルアジーズ王に対して南部より激しい蜂起を起こさせることとなる。

そしてヨルダン国王であったアッシャリーフ・アブドッラー・ブン・アルフセイン・ブン・アリー・アルハーシミーが彼を支援した。彼はイブン・ラファードに指揮を執らせ、北方か

らアブドルアジーズ王に対して戦争を仕掛けた。

しかしながらアブドルアジーズ王はこの両者の動きを封じ込めてしまった。そしてアルイドリース一族と彼等の指導者であったメッカ大守アッシャリーフ・アルハサン・ブン・アリーはイマーム・ヤヒヤーの元に避難せざるを得なくなった。

イマーム・ヤヒヤーは彼等の亡命を受入れ、アブドルアジーズ王の彼等の引渡し要求を拒絶した。また同年イマーム・ヤヒヤーは彼のサアダ州総督のサイフ・アルイスラーム・アハマドに軍隊を授け、ナジュラーンを占領させている。

イマームの影響力はこのナジュラーンと近郊のバドル市そしてワーディ・ナシュールまた同様にフィーファー山、ナジュラーンに隣接するヤーム地方のバニー・マーリクに及んだ。そしてこれら全ての出来事が要因となり、アブドルアジーズ王をして、同年イマーム・ヤヒヤーとの戦宣告をさせることとなるのであった。だが一方で両者間の会談は継続して行われていた。

アブドルアジーズ王の軍隊はイエメンの領土に三方向、即ち三つの戦線から侵攻して来た。

第1の戦線はサアダ地方に向かうものであって、その任務は、サヌアー方面の中心にある高台を支配することであった。その指揮官は皇太子であるサワード・ブン・アブドルアジーズであった。

第2の戦線はアシール・ティハーマ方面に向かうものであって、その任務はナジュラーンを占領することとホデイダ方面のティハーマへ前進することであった。その指揮官はファイサル・ブン・アブドルアジーズであった。

そして第3の戦線は、占領後のナジュラーンの支配を任されており、その指揮官はハーリド・ブン・アブドルアジーズであった。

イマーム・ヤヒヤーは大部隊を準備したが、その指揮官は彼の息子達であった。サアダ戦線ではアハマドとアルハサン、そしてアシール戦線とティハーマ地方方面ではアブドッラーと彼と共にアブドッラー・ブン・アハマド・アルワジールがその任に当たった。

しかしながらイマームの軍隊には移動手段、食料供給、軍需物資の多くが欠乏していた。彼の息子のアブドッラーはアルワジールに任務を与えイマーム・ヤヒヤーの元に送り、そしてイマームはサウド家のアブドルアジーズの元へと彼（アルワジール）に役目を与えて送り込んだのであった。そして交渉が行われた。（この交渉は西暦1934年11月、アブハーにおいて行われたが失敗に帰した）。

事態はサウジ軍に、ティハーマ戦線において、マイディーまで進撃するチャンスを与えることとなり、アブドッラーはホデイダから撤退を余儀無くされ、父親のもとに帰還した。そして彼は、軍事情勢やサウジ軍の武装能力を父親に警告したのであった。

だがこの帰還は実際には、サウジ軍がマイディーから動き始める前にホデイダから逃げ出

した口実を父親にするためであった。その折り、イマームのマイディーの総督はサウジ軍に抵抗し、その進撃を食い止めていた。にもかかわらずイマーム・ヤヒヤーからマイディーの総督に対して、サウジ軍に抵抗することを止める様命令書が発布された。それはイマームが、ティハーマの諸部族の自分に対する友好関係に安心出来なかったからである。

そしてサウジ軍はファイサル皇子の指揮の下、進撃を続けとうとうホデイダに到着し、そこを占領した。そしてサウジに対する友好を宣言したティハーマの諸部族は、その進軍中彼を支援していた。またイギリスがファイサルを支援する際に使用していた車両及び運搬車両が、この進駐の速度を早めるのに貢献した。

そしてイマーム・ヤヒヤーは最早、自分の息子のアハマドの進軍を止めざるを得なかった。アハマドとサウジ軍の間に戦闘が起こっており、彼の軍隊はほぼ最終局面を制しかけておりサウジ側国境に侵攻していた。そしてサウード・ブン・アブドルアジーズ皇子は、上述の戦線において後方にイエメン軍の戦利品となる武器、軍需物資、多くの食料品を残して、この戦線から撤退を強いられていた。

戦闘停止及びファイサル指揮下のサウジ軍とアハマド指揮下のイエメン軍双方の、戦争開始前の状態への撤退に関する両者の交渉が完了した。この事は、戦争に終止符を打ち、両者の相剋をなくす最終的な交渉の下準備の為に行われた。

イマーム・ヤヒヤーから彼の息子のアハマドに対して、到達した地点から撤退する様命令書が発布された。それはファイサルがホデイダとティハーマから撤退する見返りに行われた。そしてこの様に諸事が執り行われ、嫌々ながらアハマド・イマーム・ヤヒヤーは撤退命令を受け入れた。

こうしてイエメンとサウジ間の交渉が始まったのである。そしてこの交渉はターイフ協定として実を結ぶこととなった。イマームはアブドッラー・ブン・アハマド・アルワジールを代表として立て、他方アブドルアジーズ王はその実子のハーリド皇子を代表に立てたのである。

ターイフ協定についてであるが、これはアブドルアジーズ王がティハーマの諸港湾都市及び諸都市のうち、ホデイダの港市とその他を接收していたことにより、協定の条件を定める主導権を握ることとなった。

協定の内容は以下のとおりである。

第1条項：イマームがアシール・ティハーマ地方及び隣接するヤーム県において統治していたもののうち、ナジュラーン、フィーファー、バヌー・マーリクの諸都市を明け渡すこと。

第2条項：イマームが捕縛した上記の諸地域内の捕虜を引き渡すこと。

第3条項：イマームの元へ避難したイドリース家の関係者をサウジに引き渡すこと。

イマーム・ヤヒヤーは以上の条件を受入れ、その結果ヒジュラ暦1353年サファル月（イスラーム暦第2月）、西暦1334年5月20日、ターイフ協定として知られる合意が成立することになったのである。

イマーム・ヤヒヤーが何故アシール・アルジバル地方において、前線部隊の進軍停止の指令を発し、ティハーマ地方のマイディーやハルドの諸都市から撤退するように命令を下したのか、それらの要因に関して質問をする者がいるとしたら、それについては次の様に回答出来るであろう。

- 1－イマームはティハーマ地方における戦況が、イエメン軍が所有していなかった近代兵器や運搬車両を装備したサウジ軍に利する様な変化を恐れていた。
- 2－そしてイギリスの戦闘艦艇との結び付きを恐れていた。というのは、イギリスはアブドルアジーズ王と友好・防衛協定を結んでいたからである。
- 3－ティハーマ戦線にいたイエメン軍の大部分は、この地方の暑い夏の季節に長期間、抵抗運動を続けるだけの力強さがなかった。
- 4－ティハーマの人々のイマームに対する忠誠心の欠如、イマームと彼の軍隊に対する協調の欠如、のみならずサウジ軍に参加するという可能性があることをイマームが知っていたこと。特に最後の項目に関しては、ホデイダに到着するまでティハーマにおいて進軍中のサウジ軍に、ティハーマの諸部族が協力していたことをイマームは知っていたからである。

これらの諸理由はイマームの条約締結の理由付けよりも明白である。即ちイマームはイスラーム教徒達の流血の惨事を止めることを熱望し、（その協定が例え実際に外国勢力の思惑を意味の無いものにしたとしても）イエメンとサウジ両国間の惨劇の状態を利する、といった諸外国の介入の道を絶つという理由によって戦闘を停止する、という理由付けを行っていた。

イマームとアブドルアジーズ王との間の戦争に関して、イマームにこの立場を取らせた動機が例え何であれ、この立場こそが前述の合意を導くことになるのである。しかしイマームはこの合意によってナジュラーンを初めとするアシール・アルジバルとアシール・ティハーマの諸都市を最終的に手放したわけではなく、イマームがそれらの地に関し20年間にわたり、アブドルアジーズ王に引き渡しているだけであって、20年間の終了間際の6ヵ月前にこの合意の修正が成されるのである。

この事はエルサレムの最高イスラーム会議が、ジェッダに同年の当初、両国間の合意が締結される前に、両者の差異を埋める試みを成すために、使節団を送り込んでいるのである。

この使節団はシリアの代表としてハーシム・アルアッターシー、エジプトの代表としてムハンマド・ウルーバ、パレスティナの代表としてアミーーン・アルフサイニー翁そしてレバノ

ンの代表はシャキーブ・アルスラーン首長であった。この当時まだアラブ連盟は設立されていなかった。

上述の合意に基づき国境線策定委員会が構成された（注5）。そしてこの委員会はその活動を1935年に終了している。マイディーの北方の紅海岸からアッブウアルハーリー砂漠の端まで約400マイルにわたる国境線に240にのぼる支柱が建てられた。また翌年より正確に実情に沿って、国境線を適切なものとするために必要な諸変更が行われている。

また両国は国境線から5キロ以内の地に城塞を建設することを禁止する項目を遵守することになる。また同様にこの委員会は国境線上に展開する諸部族の権益を監視する。これは現時点及び将来にわたり、両国の一方に対し、村落や部族が友好的態度を取ったり、服従したという苦言を引き起こさない様にするためであった。

（注5）：「現代イエメンの構図」サイード・ムスタファー・サーリム教授 P. 427

イエメン史概説「現代史」P.99～106